博士学位論文審査要旨

申請者　　山本幸正
論文題目　　マスメディア時代における新聞小説の研究　――石川達三から松本清張へ
申請学位　　博士（学術）
審査委員
　主査　　千葉俊二　　早稲田大学教育・総合科学学術院教授
　副査　　石原千秋　　早稲田大学教育・総合科学学術院教授
　　和田敦彦　　早稲田大学教育・総合科学学術院教授
　　山口政幸　　専修大学文学部教授

１、本論文の目的と構成

本論文は、第二次世界大戦後に発表された新聞小説を研究したものである。新聞小説家の中でも「社会派」として知られる石川達三の新聞小説と、戦後における社会派推理小説ブームを牽引した松本清張の新聞小説を主に取り上げ、マスメディア時代における新聞小説の諸相を追求することを目的としている。いずれの論においても、これまで調査の手も加えられていなかった初出紙をはじめとする資料の綿密な調査にもとづいて論が組み立てられており、特に北九州市立松本清張記念館が所蔵する「黒い風土」の原稿を調査し、そこから新聞小説の具体的な執筆過程、および新聞連載小説のかかえるさまざまな特性を浮き彫りにして、そのメディア史、文化史、社会史などにおける問題の一端を明らかにしている。

以下、目次によって全体の構成を示せば、次の通りである。

序章　松本清張と新聞小説の一九五〇年代

第一部　読者・メディア・小説家　　――石川達三、川崎長太郎、そして松本清張へ
　第一章　マスメディアの中の小説家　――新聞小説家としての石川達三
　第二章　新聞小説家の意見　――石川達三の「自由」談義
　第三章　新聞小説家と私小説家　――二つの読者戦略
　第四章　松本清張の新聞小説第一作　――「野盗伝奇」論

第二部　清張、新聞小説を書く　――新聞小説「黒い風土」を読む
　第一章　原稿用紙から見た新聞小説　――新聞小説「黒い風土」の原稿から
　第二章　改稿される新聞小説　――「黒い風土」から『黄色い風土』へ
　第三章　周縁からの物語　――新聞小説「黒い風土」を読む

第三部　「砂の器」を読む
　第一章　「砂の器」のたくらみ　――新聞小説における松本清張の読者戦略
　第二章　〈眼〉から〈耳〉へ　――「砂の器」を聴く

結語　これからの松本清張研究、これからの新聞小説研究のために

２、論文の概要

序章　松本清張と新聞小説の一九五〇年代

松本清張は、週刊誌、カッパブックス、テレビ、映画など多様なメディアを通して読者と結びついていた。しかし清張がデビューした当時、最も有力なマスメディアは新聞だった。松本清張にはまとまった新聞小説論はないが、本章では、菊池寛と佐佐木茂索を扱った清張の作品『形影』などを通して、清張の新聞小説観を再構成を試みている。清張は、敬愛していた菊池寛と同様、幅広い読者を魅了する作品を書こうとしたが、新聞小説家としての清張は、地方紙から全国紙の朝刊へと着実なステップを積み重ねてゆく。新聞小説の黄金時代ともいうべき一九五〇年代にデビューした清張は、新聞というメディアを通して作家としての地盤を固めてゆき、後に「国民作家」と呼ばれるようにまでなった。

第一部　読者・メディア・小説家　　――石川達三、川崎長太郎、そして松本清張へ

第一章　マスメディアの中の小説家　――新聞小説家としての石川達三

松本清張は「社会派推理小説」の代表的作家として知られているが、清張以前から新聞小説を舞台に「社会派」として認知されていたのが石川達三である。本章では、清張が新聞という舞台で小説を発表するに際して、少なからず意識した石川達三の戦後の新聞小説に焦点を当て、マスメディア時代における新聞小説の諸相を明らかにしている。一九四七年に発表した「望みなきに非ず」が評判となり、次の「風にそよぐ葦」も高く評価されたにもかかわらず、石川達三は新聞小説を芸術とは認めなかった。しかし同時代の言説空間において新聞小説が注目され始めると、新聞小説論をしばしば執筆するに及び、石川の中に変化が生じてきた。

不特定多数を読者とする新聞小説には、特殊なテクニックが要求される。時に読者におもねることも必要となる。しかし石川は、読者におもねることなく、自らが必要と信じる問題を果敢に提起する特別な新聞小説家としてみなされるようになり、また石川自身も、独特な新聞小説家であることを自ら誇示するようになる。石川の新聞小説家としての自恃は、自らがマジョリティに支持されているという自信に由来するが、石川は新聞小説において、マジョリティの支持を取りつける巧みな話法を編み出し、マジョリティに自らの思想を支持させることに成功した。こうした石川の影響力は、新聞小説という枠を越えて、同時代の言説空間を席巻していくことになった。

第二章　新聞小説家の意見　――石川達三の「自由」談義

本章では、新聞小説家としてマジョリティの支持を取りつけた石川達三の発言が、同時代の言説空間に大きな影響を与えていく様相を明らかにしている。新聞小説「四十八歳の抵抗」を成功させた後、外遊し、中国やソ連をまわって帰国した石川は、一九五六年七月に「世界は変った」を『朝日新聞』に発表、自由に制限が設けられている中国やソ連の社

会状況を賞賛し、無制限の自由を謳歌している日本の状況を批判した。石川の発言は大きな反響を呼び、論壇や文壇において、「自由」についての活発な議論が展開されることになった。しかし、同時代に臼井吉見や中村光夫が指摘したように、石川の見解にはわざわざ批判の言辞を費やさなければならないほどの内容でもなかった。にもかかわらず、石川の発言を等閑視することは許されなかった。本論では、同時代の言説空間における石川達三のポジションの分析を通して、マジョリティを味方につけた新聞小説家の組織した磁場の強靭さについて論じている。

第三章　新聞小説家と私小説家　――二つの読者戦略

本章では、石川達三の読者戦略と、私小説家・川崎長太郎の読者戦略について論じている。マジョリティに支持される作家として君臨した石川達三に対して、川崎は小田原の物置小屋に閉じこもって、私小説を書き継いでいたマイナーポエットに過ぎない。にもかかわらず、石川は「自由の敵」という小文で、谷崎潤一郎の『鍵』とともに川崎の「硬太りの女」を激しく批判した。石川が、川崎の私小説を、口を極めて難詰しなければならなかった理由は、両者の読者戦略の違いにある。石川達三も川崎長太郎も、読者を引きつけるための戦略的仕掛けを小説におこなっていたが、特定の女性読者を意識した川崎の読者戦略と、マジョリティである男性読者を対象とする石川の読者戦略は、真っ向から対立するものだった。松本清張は石川達三と同じく、マジョリティに愛された小説家であるが、読者に対する意識や戦略は、石川とは異なるものであった。

第四章　松本清張の新聞小説第一作　――「野盗伝奇」論

「野盗伝奇」は松本清張が一九五六年に地方紙に連載した新聞小説の第一作であり、これまで先行研究もなく、正確な初出紙も判明していなかった作品である。初出紙の調査のうえで、この作品の特徴を多角的に分析し、清張文学における新聞小説の位置を論じている。一九五〇年代の新聞読者調査からは、「野盗伝奇」前後の清張が、新聞の読者にとってどのような存在だったのかを確認し、新聞読者が松本清張の登場を待ち望むようになるのが、一九五八年の『点と線』『眼の壁』によってはじまった社会派推理小説ブーム以降のことだったことを明らかにしている。新聞の読者は、新聞小説欄で推理小説が連載されることを期待し始めたが、一九五九年の「黒い風土」が連載される前後に、新聞小説欄に推理小説は相応しくなく、連載することは不可能だといった議論も存在していた。松本清張は、新聞で推理小説を連載していくことはできないという断案に抗って、「黒い風土」を書き継がねばならなかった。

第二部　清張、新聞小説を書く　――新聞小説「黒い風土」を読む

第一章　原稿用紙から見た新聞小説　――新聞小説「黒い風土」の原稿から

北九州市立松本清張記念館所蔵の「黒い風土」の原稿を調査した報告である。「黒い風土」の連載時、松本清張は平均で毎月十一本の作品を発表し続け、執筆量の限界に挑んでいた。それゆえ速記者を活用していたが、清張は速記者が書いた原稿に眼を通し、細部にわたって訂正を施していた。時に新聞小説では異例である「訂正記事」を出すことも厭わ

ず、「多作即乱作」という常識に挑戦しようとした清張は、「黒い風土」という新聞小説を推理小説に仕立てるべく尽力していた。また原稿の調査を通して、挿絵を担当した生沢朗との関係も明らかにしている。新聞小説において、挿絵は非常に重要な役割を担っているが、小説家と挿絵画家の具体的な関係性を知ることは難しく、今回の調査よって両者の具体的な関係の一端に迫ることができた。

第二章　改稿される新聞小説　――「黒い風土」から『黄色い風土』へ

「黒い風土」の連載終了後、単行本を刊行するに際して清張は、重要な役割を担っていたプロットを大胆に削除し、『黄色い風土』と改題して出版した。『黄色い風土』で加筆された新しいプロットは皆無であり、結果として『黄色い風土』は「黒い風土」を縮小再生産したものである。しかし、『黄色い風土』で削除された部分を見ることで、清張が新聞小説「黒い風土」での試みが明らかにされる。「黒い風土」において清張は、推理小説というジャンルの特徴を、新聞小説という舞台で可能な限り実現させようと格闘しており、また新聞社や新聞記者への批判を目論んでいたことも分かる。同時代のメディアにおいて大手新聞の社会部記者は花形の存在であったが、清張は、大手新聞社の周縁に位置する週刊誌記者・若宮四郎を視点人物に据え、社会部記者というあり方を相対化しようとした。新聞小説を舞台に新聞社を批判するプロットは、読者の欲望に敏感な清張の面目躍如といったところだが、新聞小説と単行本の読者を同一視することは出来ず、『黄色い風土』においてはそうしたプロットが全て削除された。

第三章　周縁からの物語　――新聞小説「黒い風土」を読む

「黒い風土」において重要なのは周縁という位置である。探偵役の若宮四郎は大手新聞社の週刊誌記者に過ぎず、周縁の存在に過ぎない。それゆえ若宮は時に、社会部記者という中心への羨望と嫉妬を露わにする。同時に、周縁性を保持している存在であるからこそ、相対的な自由を担保することが可能になり、結果として〝個〟としての自由も享受することができた。また、「黒い風土」では、地方支局や通信局が大きな枠割を果たす。そうした地方（周縁）の存在に対して若宮は、東京に勤務する記者であるがゆえに、優位にある。すなわち若宮は、マジョリティの中で自らの周縁性を意識させられる存在である。こうした若宮の位置は、〝中流〟意識に通じるものである。そして〝中流〟意識こそ、新聞の購読者の多くが有していたものだった。清張が設定した若宮のポジションは絶妙である。

さらに周縁という点で注目しなければならないのは、物語の舞台である。「黒い風土」が連載されたのは、『北海道新聞』などの地方紙だった。清張は、新聞の読者を満足させるべく、若宮を移動させる。新聞の読者に親しい場所を物語の舞台として選択し、しかも清張は、視点人物の若宮に、しばしばその土地で発行されている地方紙を読ませている。視点人物が地方紙を読むという行為は、今まさに新聞を手に取っている読者の行為と重なり合う。「黒い風土」で清張は、視点人物と読者を、読むという身体的行為を媒介にして同調させようとした。物語の舞台として周縁を積極的に採用し、さらに全国紙に対して周縁に位置づけられる地方紙を読ませるという行為によって清張は、新聞小説を新聞読者に親しいものにしようとしていた。そして「黒い風土」における新聞を読む新聞小説という方法は、以後の清張の新聞小説において繰り返し用いられる戦略となる。

第三部　「砂の器」を読む

第一章　「砂の器」のたくらみ　――新聞小説における松本清張の読者戦略

本章は、松本清張がはじめて全国紙の新聞小説欄に連載した「砂の器」を、新聞小説という側面に着目して分析している。清張は、「砂の器」の冒頭からしばらく、推理小説のサスペンスの手法を採用し、事件も視点人物も明らかにしないまま、連載を書き継いだ。さらに視点人物である今西栄太郎が登場した際には、その生活の細部を丁寧に描き出している。「砂の器」で清張は、新聞小説に推理小説は相応しくないという臆断に反旗を翻すと同時に、庶民的な生活の細部を描写することで、読者の共感を呼び込もうとした。また「砂の器」では、視点人物に新聞を読ませるという方法が採用されているが、挿絵を担当した朝倉摂も、しばしば新聞を読む今西の姿を描き、新聞を読む読者の眼差しと今西の視点を重ね合わせようとした。読むという身体的行為によって、清張は小説世界と読者が存在する現実の世界をつなぎ止めている。

また今西が読むミュージック・コンクレートに関する記事の存在や記事の読む今西の姿は、「砂の器」が連載された『読売新聞』の多くの読者とも通底している。松本清張の小説の特徴として、「小説を読者の世界のなかに投げこむ」ということが指摘されているが、「砂の器」には、そうした特徴が如実に示されている。「砂の器」で重要な役割を果たす前衛芸術家グループ「ヌーボー・グループ」の動向を今西は、常に新聞などのメディアを通して得ている。「ヌーボー・グループ」に代表される特権的な階層は、一貫して〈表象の世界〉に位置づけられるが、それに対して今西は〈現実の世界〉に存在する。その〈表象の世界〉から隔てられた〈現実の世界〉が、〈読者の世界〉と結びつくとき「砂の器」の世界は完成する。原作を大幅に変更して作られた映画「砂の器」は、大きな成功を収めたが、清張の「砂の器」を新聞小説として読み直すことで、清張が仕掛けた新聞小説としての多種多様な仕掛けが内包していたことを明らかにしている。

第二章　〈眼〉から〈耳〉へ　――「砂の器」を聴く

本章は、小説「砂の器」に潜在する可能性を探っている。小説家としてデビューする以前に朝日新聞西部本社広告部意匠係に勤務し、また商業デザイナーとしても活躍していた松本清張には、〈眼〉の人といった印象が強い。しかし作品の細部においては、実はしばしば〈音〉や〈声〉が重要な役割を果たしている。その代表が、ミュージック・コンクレートの作曲家・和賀英良を取り上げた「砂の器」である。和賀の音楽は、世界に響く具体的な〈音〉や〈声〉を録音し、電子機器によって変形させコラージュすることで作られる。しかし皮肉なことに、作曲家であり世界に耳を澄ますはずの和賀が、〈音〉に〈耳〉を澄ます場面は「砂の器」に描かれていない。実際「砂の器」の中で、世界の〈音〉や〈声〉に〈耳〉を開くのは、刑事の今西栄太郎なのである。前衛音楽はもちろんのこと、音楽とは無縁な存在である今西が世界に〈耳〉を開き、今西の〈耳〉が捉えた〈音〉や〈声〉が「砂の器」の事件を解決へと導くのである。

ノイズを排除して、楽音によって純粋な音の連なりを構成することを目指した音楽に異を唱え、二十世紀の音楽はノイズを取り込み、世界に自らを開こうとした。ミュージック

・コンクレートも、そうした動きから生まれた音楽であるが、それは世界に溢れるノイズを変形し、自らの楽曲に合わせるものにしてしまった。音そのものはノイズ的であるが、実のところそれは作曲家の意図に奉仕するべく変容させられたノイズである。世界に響くノイズをノイズそのものとして感知することは難しいが、それに〈耳〉を開く今西の形象は、結果的に閉塞へと向かうことになった前衛的な現代音楽への批評たり得ている。

結語　これからの松本清張研究、これからの新聞小説研究のために

「砂の器」以降、社会派推理小説を牽引していた松本清張は、「本格的社会小説」の書き手へと飛躍することを試みた。一九六一年十一月から『読売新聞』の朝刊で連載が始まった「落差」には、そうした清張の姿をうかがうことができる。「本格的社会小説」を書くにあたり、清張は教科書選定という教育問題を題材にしたのは、一九五九年に『朝日新聞』で連載が終わった石川達三の「人間の壁」を意識したからである。教育問題を扱い、稀に見る成功を収めた「人間の壁」は、石川の「本格的社会小説」の代表であるが、それゆえ『読売新聞』は「落差」を、『朝日新聞』の「人間の壁」に対抗するべく連載したのである。「落差」により清張も成功を掌中にすることができたが、「砂の器」以後の作品を評価しないという声もある。

実際、「砂の器」以降に、それに匹敵するベストセラーは生まれず、「点と線」や「砂の器」への支持が高い。ここにベストセラー作家の評価についての難しい問題がある。一度ベストセラー作家と認知された作家が、ベストセラーを生み出せなくなったら、作家としては否定されることが多い。しかし、ベストセラー作家のベストセラーにならなかった作品の可能性を探求することの必要性もある。実際、清張自身は「砂の器」以降、ベストセラーを生み出すことに腐心しなくなった節があり、書きたいことを書きたいように書くという姿勢を鮮明に打ち出すようになった。「眩人」や「火の回路」にみられる実験的で前衛的な相貌は、その証左であり、そうした作品の可能性について、今後も追求し続けていく必要がある。

また戦後の新聞小説についても、考察の対象とするべき作品は数多く存在する。文学研究として戦後の新聞小説を扱うことは容易ではなく、理論的にも歴史的にも困難をともなうが、戦後の新聞小説研究は社会史、メディア史、世相史に関連するという意味において重要である。情報の宝庫といえ、第一級の歴史資料だといえる新聞小説を繙くことで、忘却の淵に追いやられた問題を探求するきっかけが得られる。また新聞読者の思想や嗜好を考える契機にもなり、同時代の言説空間の中で、その新聞が占める位置も考察することができる。戦後の新聞小説の資料は、急速に散逸しつつあるが、それらは重要な歴史資料であり、それらを収集・整理していくことは、戦後を忘却しないためにも必要である。

３、総評

本論文は、戦後における一九五〇年代のマスメディア時代の新聞小説の問題を包括的かつ多元的に論じたものである。論者の膨大な読書量によって支えられた該博的な知識と、自らの思考を的確な言葉によって表現してゆく筆力は並大抵なものでなく、これまで研究の空白部分であった戦後の新聞小説研究という分野に果敢に挑戦し、大きな成果をあげた

ことは高く評価されるところである。本論は三部構成から成り立っており、第一部は「社会派」の新聞小説作家として認知されていた石川達三から、「社会派推理小説」の代表的作家として知られる松本清張への転換を通して、一九五〇年代の新聞小説の時代的な特色を浮き彫りにしている。ここに展開されたメディアを介した作家と読者との関連は非常に興味深く、新聞小説に仕掛けられた戦略を分析することで、文学研究の境域を越えた読者論、文化史、メディア史、世相史において画期的な成果となっている。しかも、ここに多く集積された新聞小説についての言説は、今後この分野における研究に大いに役立つものとなり、意義深いものである。

第二部は、北九州市立松本清張記念館に所蔵されている原稿調査にもとづいた「黒い風土」論である。「黒い風土」は、後に『黄色い風土』と改題されて単行本として刊行されるが、膨大な量の原稿および初出紙を丹念に調査することで、そこに伏在している問題を明らかにしてゆく。資料に即しながら論を展開してゆく典型的な実証研究の見本といってもいいような出来映えを示しおり、松本清張研究にも高く評価された論である。第三部は松本清張の代表作でもある「砂の器」の作品論である。ここにおいては論者のきわめて優れた作品へのアプローチの仕方と、柔軟で的確な批評性にとんだ解釈が示されている。このように本論文は、優れた三部構成として完成されているのだが、それぞれの論文の完結性が強く、論全体を見渡したときにそれぞれのアプローチの方法が異なり、構成上アンバランスとなっていることが否めない。この優れた論考で唯一の難点をあげるとすれば、そうした統一的な方法にやや欠ける憾みがあるということである。今後、新聞小説研究のための研究方法の確立ということも希求されるが、この論文はその分野におけるこれまでの空白を埋めるもので、これからの研究のための示唆にとんだ可能性を示すものとして高く評価できる。よって、審査委員一同、本論文が「博士（学術）」を授与するに十分値するものであるとの結論に達した。ここに報告する次第である。